

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	意味の成分分析の次元 : バーリングによる英語の食事名の扱い方に対する批判的考察
Auther(s)	杉浦, 茂夫
Citation	ニダバ , 2 : 21 - 29
Issue Date	1973-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044689
Right	
Relation	



[Summary]

Dimensions in the componential analysis of meaning
--a critical review of Burling's treatment
of meal terms in English--

Shigeo SUGIURA

This paper is an attempt to review Burling's treatment of meal terms in the English spoken in Jamaica and the United States and to propose some revisions of his analysis.

Robbin Burling, who says in the preface of his *Men's Many Voices* that he has been 'wandering back and forth across the border between anthropology and linguistics,' speaks of the diversity (i.e. class dialects) of Jamaican English, and after showing in the form of a table the meal terms that numbers of each class use, states that 'only two dimensions of semantic contrast are needed to distinguish the meanings of these various terms:

- (1) the time at which the meals are eaten (henceforth T), and
- (2) the size or heaviness of the meal (henceforth H)'.

Concerning American English, he adds, 'it is not difficult to offer similar definitions to the terms that residents of the United States use...'. .

The two dimensions (T and H) seem plausible and universal in the componential analysis of meal terms when we take the digesting mechanism of human beings into consideration. But the present writer, as a linguist and native speaker of Japanese, feels inclined to propose two revisions of Burling's treatment.

The first point the writer wants to make is that Burling's dimension *heaviness* should be changed to *contents*. The reports by Dr. Hattori and I.C. Brown are cited as evidences of the fact that what is customarily fixed is the *contents* of meal, not the *heaviness*. It must be admitted that *heaviness* is only a result of *contents* and therefore secondary.

The second point is that in each particular language these

two dimensions are not of equal importance, one of them having the priority to the other. This writer asserts that it is the *time* dimension which is primary in Japanese as the morphological structure of each meal term indicates. According to this author's analysis, Korean too can be referred as an example of *time*-dimensioned languages, while English is primarily *contents*-dimensioned and only secondarily *time*-dimensioned.

意味の成分分析の次元

—バーリングによる英語の食事名の の扱い方に対する批判的考察—

杉 浦 茂 夫

1 Burling (1970:34ff) の所説の紹介から始めよう。彼によれば、ジャマイカ島で話されている英語は、英国やアメリカ合衆国の英語とは非常に異なり、混種語 (creole) と考えられる程であるという。食事名については、*breakfast, lunch, tea, dinner, supper* が用いられているが、これらの用語の用い方は、世界の他の場所で話される英語とは微妙な違いがあり、ジャマイカ島の内部においても一定していない。社会階級のそれぞれが独得の形式を持っていて、その差を説明するためには四つの階級レベルを認めなければならない。すなわち、(1)都市や郊外に住む上層中流階級、(2)商店主を含む自営の下層中流階級、(3)土地所有労働者 (estate laborers) 及び田畑から離れた場所に住んでいる小農、(4)自分が働く田畑の近くに住んでいる小百姓、である。食事名の用法は次表のようになる。

方言	5:00~7:00 A. M.	11:00~正午	4:00~6:00 P. M.	7:00~8:00 P. M.	10:30~深夜
(1) <i>breakfast</i>	中	<i>lunch</i> 中	<i>tea</i> 軽	<i>dinner</i> 重	<i>supper</i> 軽
(2) <i>breakfast</i>	中	<i>dinner</i> 重	<i>supper</i> 中	<i>supper</i> 軽	
(3) <i>tea</i>	軽	<i>breakfast</i> 中		<i>dinner</i> 重	
(4) <i>tea</i>	軽	<i>breakfast</i> 重	<i>dinner</i> 中	<i>supper</i> 軽	

(軽 = light, 中 = medium, 重 = heavy)

これらの用語の意味を区別するには、二つの意味的対立の次元を考えるだけでよい。すなわち、(1)食事をとる時間、(2)食事の量 (size or heaviness)。時間の次元を T で表わし、示差と認められねばならない一日の時間区分を次のように記号化できる。

T ^m	(morning)	5:00~7:00	A. M.
T ⁿ	(noon)	11:00~正午	
T ^d	(afternoon)	4:00~6:00	P. M.
T ^e	(evening)	7:00~8:30	P. M.
T ^l	(late)	10:30~深夜	

同様に、食事の量の次元を H で表わし、三つの程度を次のように示すことができる。

H^l 軽い食事。通常、熱い飲み物を含むが、熱い食べ物は含まない。

H^m 中くらいの食事。

H^h 一日の中で最も量の多い食事。

これらの省略記号を組み合わせると、ジャマイカ島の四つの社会階級のそれぞれによって用いられる五つの食事名を容易に示すことができる。

方言	<i>Breakfast</i>	<i>Lunch</i>	<i>Tea</i>	<i>Dinner</i>	<i>Supper</i>
(1)	H ^m T ^m	H ^m T ⁿ	H ^l T ^a	H ^h T ^e	H ^l T ^l
(2)	H ^m T ^m			H ^h T ^a	H ^m T ^a / H ^l T ^e
(3)	H ^m T ⁿ		H ^l T ^m	H ^h T ^e	
(4)	H ^h T ⁿ		H ^l T ^m	H ^m T ^a	H ^l T ^e

上のように並べてみると、単語間の相違だけではなくて、階級間の相違も一目瞭然になる。たとえば、*tea* は常に軽い食事であるが、(1)の階級にあっては午後に、(3)や(4)の階級にあっては午前にとられる。また、*breakfast* は、上層の二階級のほうが下層の二階級よりも早い時間にとることがわかるという。

さらにBurlingは、合衆国の住民が用いる食事名に対しても類似の定義を与えることは困難ではないとして、次のように述べている。Tの区分が、T^m (morning)、Tⁿ (noon)、T^e (evening)と改められ、Hの区分は、e-m-hのままで適当であろう。そうしてみると、

<i>Breakfast</i>	<i>Lunch</i>	<i>Supper</i>	<i>Dinner</i>	<i>Coffee Break</i>
H ^m T ^m	H ^m T ⁿ	H ^m T ^e	H ^h T ^{n-e}	H ^l

(*Coffee Break*はTに対してunmarked)

となるという。

2 意味の成分分析の対象として、専ら親族名称語彙が利用されてきたなかで、Burlingが新しい食事名という小分野を対象に取り上げたことは意義深いこととして称賛されよう。また、人類の消化機構を考慮すれば、TとHの次元はもっともであり、普遍的なものと思える。しかし、筆者は上のBurlingの分析に対して不十分という感じを抱かざるをえない。それは、Burlingの「人類学と言語学の境界を行きつ戻りつさまよう」という立場に由来するものであるかもしれないが、彼の分析はraw materialsの提示に止まっている、と感じざるをえない。本稿では、言語学プロパーの立場からこれらの五語の意義素を探るためには、どのような次元が必要かを考察し、併せて、日本語などの食事名についても考察してみたい。

3 Hという次元について考察してみよう。

上に挙げたBurlingの表示についてみると、各食事名のHの次元が、たとえば*breakfast* は

mとhというように、二段階にわたっていることに気がつく。hとlを同時に含む食事名はさすがに存在しないようだが、いったいHの次元の三分区は果して合理的なものであろうかという疑問が生じる。*Breakfast*のhと*dinner*のhは同程度と考えてよいであろうか。もし同程度であり、しかも英語の食事名が(次節で主張するように)一次的にはHという次元によって決定されると仮定すれば、hの*breakfast*とhの*dinner*とは同一の用語で呼ばれる筈ではないか。*breakfast*は、語源的にも「断食を破る」ことであり、他の食事名と違ってTによって決定される要素が大きいということは認めるとしても、mという次元を持った*lunch, supper, dinner*については、何故三者が別の用語によって表されるのかの説明はつかないであろう。

服部博士(1968;158ff)は、合衆国の人をインフォーマントとして、朝・昼・晩の食事について詳細な報告をしておられるが、たとえば次のような記述が見出される(160ページ)。

*Lunch*と呼ばれる昼食は次のような構造を有する。もちろんこれも、いつも1揃い全部食べるわけではない。

(1) Salad. (2) Soup. (3) Sandwiches……

(4) Coffee. (5) Dessertとしてpie, cake, ice cream. を食べることもある。

また、I. C. Brown(1963;2)は、“アメリカ人はbreakfastには、fruit saladあるいはice cream and cakeを食べないが、これらが(普通breakfastとしてとる) cold fruit juice, fresh fruits, boiled eggs, cereals with cream and sugar, waffles with honeyなどどのように違うのかをエスキモ一人や南洋諸島の住民に説明してやることは困難であろう”と述べているが、これらの両グループの料理のなかには、同じ材料が形を変えたに過ぎないものもあり、Hという次元だけで両者の相違を見出すことは困難であろうと考えられる。

上の二つの証言から、アメリカ英語の場合(そして、多分ジャマイカ島の場合もそうであろうと思われるが)、習慣的に固定しているのは、食事の内容(contents)(すなわち、料理の組み合わせ、これを服部博士のように構造と呼んでもよいであろう)であって、量(heaviness)は、その結果二次的に派生する次元だと考えざるをえない。以下でも、“Hという次元”という言い方をするが、ここで修正した意味で用いていることに注意して頂きたい。

4 米山俊直氏(1968;88ff)によれば、「文化人類学的な親族用語の研究においてまず必要なものは、それらの用語が指示する実在界の事物——すなわち、考えられる親族のすべて——をお互いに区別するための方法であった。その分類規準として考えられたのが、

(1) 世代 (2) 直系か傍系か (3) 世代内の年令 (4) 性別 (5) Egoの性別

- (6) Egoと相手の間に介在する人の性別 (7) 血縁か姻族か (8) Egoと相手の間に介在する人の地位、生死、独身者か既婚者か。

であった」という。しかし、英語という特定の言語の親族用語に限ってみると、chafe(1970;4)やSlobin(1971;69ff)が指摘しているように、用いられているのは(1)(2)(8)の基準だけであり、日本語についても(「伯父」「叔父」と書き分ける時は(8)も用いているが)同様であろう。梅田博之氏(1972;50)によれば、朝鮮語では(「父母のきょうだい」を)「男性/女性・父方/母方・父より年長/年少といった特徴に注目しつつ、父方を重んじ男子を重んずるという把握のしかたをしている」という。さらに、Grenberg(1968;152f)は「父、父の男きょうだい、母の男きょうだいの三者を指示する用語は、*generational*, *lineal*, *bifurcate merging*, *bifurcate collateral*というタイプに整理できる」という趣旨を述べている。親族用語に関する上記の考え方は、食事名についてもあてはまるものであろう。すなわち、TとHは文化人類学的に考え得る規準であり、個々の言語においてはこれら二つの規準がどのように用いられているかを探る必要があるということになる。

4. 1 日本語について、この点を探ってみよう。国立国語研究所の『分類語彙集』(1964;75)によれば、日本語の食事名は次の通りである。

朝飯(あさはん・あさめし) 朝御飯 朝食 朝け 昼飯(ひるめし) 昼食 中食(ちゅじき)
おひる ひるけ 午餐 昼餐 夕飯(ゆうはん・ゆうめし) 晩飯 夕食 晩餐

この他に

間食 おやつ 夜食

も記載されているが、これらは本稿では考慮外に置くことにしよう。まず目立つのは、文体的特徴のレベルが異なる幾組かの単語が存在することである。これらの各組は、同一人物が環境や話し相手によって使い分けているものであるという点で、ジャマイカ島の英語の階級的方言とは、根本的に相違している。形態論的に見れば、文次通り*morning-meal*, *noon-meal*, *evening-meal*と英語に訳すことのできるものが大半で、「おひる」のように時そのものを表わす単語がそのまま用いられている場合もあり、Tという次元が大きな役割を演じていることは明らかである。旅館や食堂などでは、朝食時間は7:30~9:00(A.M.)ぐらい、昼食時間はだいたい11:30(A.M.)~1:30(P.M.)、夕食時間は5:00~7:30(P.M.)と決められており、一般家庭でも通常その時間内に食事をとる。従って、日本語では、 T^m , T^n , T^e の三つを区分すればよい。

日本語のTという次元に関してさらに注意すべきことがある。次の(1)の文は、筆者には acceptableである。

(1) 今朝は朝寝をしたので、朝食を食べたのは昼過ぎだったよ。

(As I got up late this morning, I took morning-meal after noon.)

この文は

(2) 今朝は朝寝をしたので、朝食抜きだった。

(As I got up late this morning, I did without morning-meal.)

とは違って、(3)を含意しているように思われる。

(3) それで、昼食を食べたのは夕方、晩食は夜中さ。

(So, I took noon-meal in the evening and evening-meal at night.)

以上の事実が意味しているのは、「日本語の食事名は、時間的なずれを伴いながらも三回食事をとった場合には、実際にとられた時間よりは、相対的な順序（たとえばO (order) という次元）によって指定される」ということであろう。しかし、Oという次元そのものは、Tという次元が強く固定しているという事実から二次的に派生した次元であると考えることができ、このことはTという次元が日本語では非常に強く働いていることの一つの表れと看做することができる。

次に、日本語の場合、Hという次元がどのように働いているか考察してみよう。朝食が最も軽く、昼食、夕食という順にheavinessの程度が増して行くのが普通であり、このことは旅館などの食事代にも反映されている。しかし、たとえば朝食の時にたいへんな御馳走を食べても、それは「朝食」であることには変わりなく、そのために呼び名が変わることは考えられない。同様に、貧弱な「夕食」も軽い「昼食」も共にacceptableである。従って、日本語においては、Hという次元は、食事名の指定においてcrucialではないと結論せざるをえない。

4. 2 梅田博之氏(1971)によれば、朝鮮語は(以下は、梅田氏による音韻表記をそのまま借用する) 'acim(朝)がそのまま「朝食」の意味に、Jonjog(夕方)がそのまま「夕食」の味に用いられるという(日本語の「おひる」という表現が思い起される)。また、これらに、「米飯又は食事」を意味するbabを付して、'acimbab, Jonjogbabが用いられることもあり、食事を意味し、ややあらたまった感じを持つ語sigmaを付して、'acimsigma, Jonjogsigmaが用いられることもあるという(日本語の「朝食」「朝御飯」などが思い起される)。「昼食」を意味するJoonsimは、「正午、昼の12時」を意味するJooyoと関係があることは明らかである。以上の事情は、食事名が時間と密接に結びついていること、時には時間を表わす用語がそのままで食事名に用いられることがあり、その程度は日本語よりも高いことを示唆しており、朝鮮語は日本語と同様、T-dimensionedであると推測することができよう。(朝鮮語については、梅田氏

から直接に詳しく information を求める予定であったが、その機会が無かったことを残念に思う。近い将来、機会を得て、この一節を書き改める予定である。）

4. 3 英語において、TとHの次元はどのように働いているのであろうか。たとえば、WNWD (College Edition, 1968)によれば、

breakfast the first meal of the day

lunch any light meal ; especially the regular midday meal
 between breakfast and dinner

dinner the chief meal of the day, whether eaten in the
 evening or about noon

supper the last meal of the day, eaten in the evening

とあり、T・Hともに作用していることは間違いないと思われる。しかし、両者が全く同等の重要性を持っていると考えられるのであろうか。先に引用した服部博士(1968)の研究によれば、*breakfast*, *lunch*, *dinner*, *supper* は、それぞれ独自の構造を持っていることは明らかである(この点は、上のWNWDの定義に必ずしも明示されているわけではない)。そして服部博士(1968;159)は、「いなかでは、*breakfast*, *dinner*, *supper* という体系だ。…都会の人々は、*breakfast*, *lunch*, *dinner* という体系の食事をする。」と述べておられるが、正午から夕刻にかけてとる食事が *lunch*, *dinner*, *supper* のいずれかを決定するのは、Hの次元であると言わねばならない。*breakfast* にはTの比重が大きいことは認めるとしても、Hの次元が全く欠けているわけではないことは、3で引用した服部博士やI. C. Brownの証言から明らかである。Hの次元はすべての食事名の区別に有効であるのに、Tの次元はそうではないという事実は、英語(アメリカ英語)においては、前者がpriorityを持つと考えることに妥当性を与えるのではないだろうか。

(1973年1月)

参 考 書 — 覧

- Brown, I. C. 1963 *Understanding Other Cultures*
 (朝日出版社テキスト版)
- Burling, R. 1970 *Men's Many Voices ; Language in Its*
 Cultural Context (Holt, Rinehart and Winston, MC.)
- Chafe, W. L. 1970 *Meaning and the Structure of Language*
 (The Univ. of Chicago)
- Greenberg, J. H. 1968 *Anthropological Linguistics ; An*
 Introduction (Random House, New York)
- 服 部 四 郎 1968 『英語基礎語彙の研究』 (三省堂)
- 国立国語研究所 1964 『分類語彙集』 (秀英出版)
- Slobin, D. I. 1971 *Psycholinguistics* (Scott, Foresman
 and Co.)
- 梅 田 博 之 1971 『現代朝鮮語基礎語彙集』
 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)
- 1972 『私の朝鮮語辞典』(『学燈』1972年9月号 PP. 48~51)
- 米 山 俊 直 1968 『文化人類学の考え方』 (講談社新書 152)